



であい

公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC/ハイエック

Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

留学生地域交流事業2017 「留学生ふれあい交流3もり」

8月7日(月)～8月8日(火)一泊二日の日程で、ハイエック(以下、HIECC)主催・引率のもと北海道内の大学などで学ぶ留学生等26名(16か国)が道南の森町を訪問。同町主催の「夏のまつり in もり 2017」への参加、特産品「ほたて昆布きんちゃく」作り体験、そして地熱発電所や熱交換施設などを見学し、森町についての理解を深め、交流した。

札幌から約4時間かけ森町に到着。同町長を表敬訪問した後、「ほたて昆布きんちゃく」作りを体験。ホタテ養殖についての説明もあり、留学生は興味深そうに話を聞いていた。「夏のまつり in もり」のプログラムの一つ「子ども御輿」には、地元の剣道チームと一緒に参加。御輿を担ぐ前に1人1本の木刀が与えられ、同チームが剣道の形を指導。動きを確認し、いざ本番へ。「面！」といいながら木刀を振りかざし町内を練り歩く留学生の姿は、見物客から多くの注目を浴びた。留学生にとっては、剣道と日本のお祭りを同時に体験できる滅多にない機会となった。

翌日は、濁川熱交換施設、ハウス栽培、そして北海道唯一の地熱発電所を見学。森町では地熱発電の際に出る余熱を利用したトマトなどのハウス栽培が盛んに行われている。

昼食時には森町からのご厚意で、全国的に有名な名物「いかめし」の差し入れがあり、留学生一同舌鼓を打った。午後からは2日間のプログラムを通しての感想、また森町がより国際化を進めるためにはどうしたら良いかなどを話し合い、アイデアを出し合った。

おいしい食べ物、親切な人々、海と山の豊かな自然に囲まれた森町を留学生は大変気に入ったよう。これからもHIECCは、留学生が北海道の様々な地域と交流する機会を提供し、北海道のさらなる魅力を発見してもらい、地域の国際化に貢献していきたい。



竹刀を手に神輿渡御に参加した留学生

HIECC(ハイエック)では、7か国9名からなる札幌市内の留学生の協力を得てカルチャーナイトに参加。今年は3つのコーナー「世界の遊びとクイズ」、「ワールド・カフェ」、「世界の民族衣装を着てみよう」を実施。また、北海学園大学人文学部の学生6名が通訳や進行役としてイベント運営のアシスタントとして大活躍した。

HIECCには開始前から待ちきれず多くの方が来場。人気コーナー「ワールド・カフェ」の開始までの間、アジアや南米、アフリカなど普段はあまり目にする事のない国の民族衣装を何枚も試着する来場者も。その後、ドイツ、ベルギー、インドネシア、アメリカからの留学生が「ワールド・カフェ」に参加し、子どもたちは留学生と楽しくおしゃべりをしたり、日本とは異なる景色や街並みの写真を見たりしながら、何か国も訪れたような気分を味わっていた。

南米3か国(ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン)の留学生が「遊びとクイズ」コーナーを担当。海外に興味がある子どもたちには特に○×クイズが人気で、全問正解を目指し表情は真剣そのもの。また、アルゼンチンやブラジルの遊びでは、子どもも大人も一緒に輪になって楽しむことができ、ゲームを介し遠く南米の国を身近に感じる機会となっていた。最後に、パラグアイの留学生が伝統舞踊「ムヘル・パラグアジャ」を披露。美しい衣装に身を包んだ留学生による優雅な踊りにより、華やかな雰囲気イベントは幕を閉じた。

カルチャーナイトは、普段は日中しか開いていない公共施設や文化施設などを夜間開放し、子どもだけでなく大人を含む市民や観光客など誰もが地域の文化を楽しめる行事としてスタート。今年で16回目の開催となり、HIECCは15回目の参加となった。



参加者が輪になりブラジルのゲーム「アドレタ」を体験

カルチャーナイト
2017 @HIECC
7月21日(金)



さっぽろ 留学生・日記

アルネス フェレル カティア ルビ さん

ポリビア多民族国

北海道大学大学院工学研究院
水工・水文学研究室



【大好きな河川を学べる北海道へ】

二度目の挑戦で奨学金を勝ち取ったルビさん。「せっかく留学するなら、心をオープンにして、自国とは全然違うところに行ってみよう」と決め、地球の裏側にある日本を選んだ。「安全だし、今まで身の危険を感じたことはないですよ」と札幌の生活は気に入っているよう。河川を専門にしたのは幼い頃の経験が元になっている。「友達の家族に誘われ10歳の時にテレビも電気もないトトロという秘境に行きました。川沿いの洞窟に行ったり、恐竜の足跡を発見したりと、全てが冒険のようで、その時に自然のとの繋がりを感じたのが原点です」。続けて、「川がなければ全ての生命は存在し得ないし、川は私の中で最も偉大な存在です」と河川への思いを語ってくれた。現在、ポリビアでは山や川に囲まれた地域でも防災措置が取られておらず、毎年洪水の被害が。「将来は専門を活かして洪水などの被害を減らせるようにしたい」と希望している。

北海道の留学生活では、勉強だけではなく人間関係でも言葉の壁を感じているそう。しかし、「壁は越えられる！」と信じ、親友を作るため、研究と併せて日本語の勉強にも励み、まずは漢字 400 語習得を目指す。どんな状況もポジティブに捉え笑顔を絶やさないルビさん。留学生活をさらに充実させ、将来は大好きな「川」を守るためさらに飛躍していくのだろう。

【ピコピコポン？ノポイゴンタ？】

国土の3分の1近くをアンデス山脈が占め、“高原の国”として知られるポリビア。ルビさんは、首都ラ・パスから南東約 450 km、標高約 2,560mの高原に位置するポリビア第3の都市・コチャバンパ出身。幼少期に見ていた日本のテレビ番組が大好きで、幼い頃から日本に対して好印象を抱いていた。話を掘り下げてみると、お気に入りだった番組は「できるかな(ノポイゴンタ)」と「ピコピコポン」というNHK教育で放送されていた番組。「本当に面白かった！」と大きな目を輝かせて感想を教えてくれた。その後、近所に住んでいた日本人女性から2年間日本語を学び、ますます日本が大好きに。「この女性との出会いで、私の人生は変わりました」。来日後、帰国したその女性の元を訪れ、日本での再会を喜び合ったそう。

高校生・アジアの架け橋 養成事業に参加して・その後

齊藤 和花さん

平成26年度「高校生・アジアの架け橋養成事業」
(カンボジア派遣)参加



境 来未さん

平成27年度「高校生・アジアの架け橋養成事業」
(ベトナム派遣)参加

アジアの架け橋参加者
INTERVIEW 第3回

9月から台湾の大学に進学する二人。海外で学ぶことを決めたのは、高校生の時に同事業へ参加したことが大きく関わっている。

「世界に目を向けるようになったきっかけは？」

- ー(齊藤さん)「2歳から弟と英語を習い始めたのがきっかけ。実は弟の上達が早く、悔しくて逆に頑張れました」と。また、「小学生の時に海外のことを教えてくれる先生に出会い、授業がとにかく楽しかった。一方、シリア難民のことを知ったときに子どもながらにショックを受け、海外に目を向けるようになりました」と真剣な表情に。
- ー(境さん)「小学校の英語の授業が全く理解できず、英語を習い始めました。また、中学校の先生が海外旅行での面白いエピソードを話してくれ、自分も「行ってみたい」と思った」と。偶然にもエピソードが似ていて、質問に答えるお互いの姿に少し驚いていた。

「『高校生・アジアの架け橋養成事業』に参加して、どうでしたか？」

- ー(境さん)「ベトナムに行く前の研修での驚きが大き過ぎて・・・学校とは雰囲気が違うし、そこで初めて会った人たちと海外に行くなんて信じられませんでした(笑)。また、事業を通して“あの人はこうだ”とか決めつけず、一人一人を「個」として見られるようになったのは、自身の大きな変化です」
- ー(齊藤さん)「高校生同士の仲間、指導してくれる先生、現地でもいろいろな人に出会えたことが良かったです。特にカンボジアの村で出会った村長さんが目に涙をため、“ありがとう”としてくれたハグの感触が忘れられず、今でもあの時感じた温かみを思い出します」と。

また、二人とも「自分が過ごす日常により感謝できるようになった」とも語っていた。

「将来の夢を教えてください」

- ー(境さん)「台中にある大学で観光を専門に勉強します。留学中に語学力を身に着け、いろいろな人と関わりがある仕事につきたいです」
- ー(齊藤さん)「この事業に参加したこと、アメリカで1年間留学したこと、台北の大学で「外国国際関係学科」で学ぶと決めました。今は具体的な夢は見つかっていませんが、まずは勉強して力を付け、自分ができることを見つけていきたいです！」

事業の参加年も高校も異なる二人が、偶然予備校で知り合い、今では双方かけがえのない存在に。慣れない外国語で専門の勉強を深めるのは大きな苦勞を伴うだろうが、今まで様々なことにチャレンジしてきた二人。一つ一つ壁を乗り越えながら、台湾の地で夢に向かって歩みを進め、世界を舞台に活躍する日はそう遠くない。